

# 紫裾濃大鎧の古い鞆むらさきすそ

日本風俗史学会 会員 齋藤 慎一  
青梅市文化財保護審議会委員

〔連載〕 武蔵御嶽神社宝物シリーズ17

紫裾濃大鎧は、古社寺保存法により、明治三十六年（一九〇三）六月から、日本美術院

で、関保之助・松原佐久監修で修理され、現在の形となりました。この時、二十八間二方白星兜鉢（三十枚張）に辛じてついていた古い鞆（五枚鞆）は、切れ切れに破損していたので取りはずされました。すでに五段目の菱縫板は失われていて、鉢付板以下四段分の各段のそれぞれが新しい革札で補われ鞆の形にまとめられ、径23.3cmの円板の台に掛けて保存されています。

この鞆については、古く享保一一年（一七二六）の「武州御嶽鎧之図」（国立公文書館蔵）が注目されています。後述する小札の仕立てから鞆が

前代より拡がる形、笠鞆への移行、鉄札交による、運動と防禦機能への進化の構造を

「鞆大満中（大饅頭。饅頭の様な勾配のひらき）、一枚交（革札と鉄札を交互に重ね綴る。鉄交）」と適切に把えています。破損状況は「吹返ハ損ジテ不見、鞆ハ鉢ヲ放レテ有」「古ク散々（切れ切れ）」とあります。明治三十六年修理前の古写真（須崎裕家蔵）にうつる鞆も吹返は欠損し搦（綴）革も切れて鉢にやっとなつている状態です。

また、寛政一三年（一八〇一）二月四日、松平定信の家臣が登山しての調査（社用日記断簡、金井家文書）によつた「集古十種」は、「鞆如此不連続モノ不少、連続セルモ

ノ一ツアリ。タメ（撓）ノ様モシレカタキニヨツテ少シクコ、ニ図ス」として破損の状況をのべ、三段連続の断片を図示し、下は一本搦、上は二本搦、小札下辺の反などまで正確に写しています。

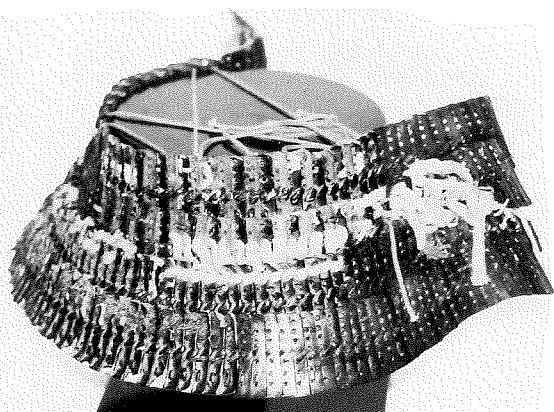
威系については二段目、三段目、四段目部分で、二段目の縄目を白、毛引を黄、三段目の縄目を黄、毛引きを紫として、四段目の縄目を「カキ」、毛引を紫と注記します。カキとあるので中紫色の存在を示しているかと思われま

す。現在の紫裾濃大鎧には黄系以外に古い糸が残っていませんし、何よりも紫裾濃という鎧の威系の配色の現存する最古の例となるので、とても貴重です。

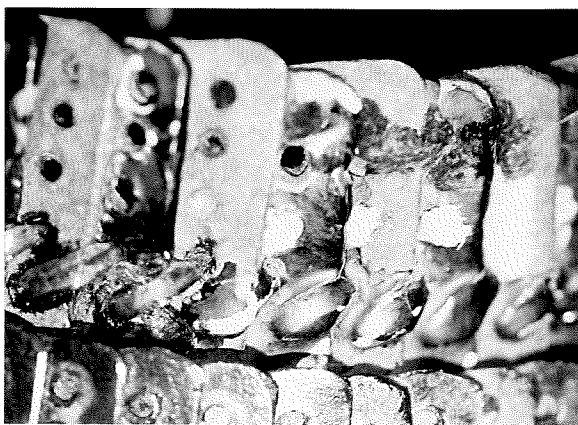
各段の小札を数えてみます。一番上の段である鉢付の板は、古い鉄札二一枚、革札二枚、明治新補の革札二〇枚で合計六九枚。二段目は、新補二七枚、古い鉄札二一枚、古い革札二六枚、計七四枚です。明治復元の現在の鞆の鉢付板は、鉄札二五枚を含めて七九枚、二段目は鉄札二六枚を含めて八四枚です。

この二段目迄は、屈曲する左右の吹返部分を除いて後頸部分は、鉄札と革札を交互に重ねた鉄革一枚交、鉄交です。鉄札のへりに捻返の加工もあります。

平安後期の当社蔵赤系威、鎌倉初頭の厳島神社蔵黒系威大鎧の鞆は五段ともまだ革札です。防禦機能が進歩し、上から二段目迄鉄交としたのが紫裾濃です。紫裾濃に続く鎌倉中期の厳島神社蔵浅葱綾威、春日大社蔵梅枝金物赤系威大鎧は鞆三段目迄鉄交となりさらに進歩しています。そして、



台に掛けられた古い鞆。三段目は古い革札60枚と新補札で合計82枚。四段目は古い革札34枚、新補札と合せ90枚。四段革札の下辺（小札尻）は外に反る。



鉢付板（一段目）の革札と鉄札が交互になる古い部分。縄目孔に濃紫糸、毛引孔に白糸が残る。その下は二段目板の新しい革小札の上部。

紫裾濃に続く年代の浅葱綾威や梅枝金物赤系の兜の鞆は、菅笠のように水平に裾を広げる傾向をはつきり造形し、やがて笠鞆という南北時代の形式に移つてゆくの

すべき形式なのです。両肩の運動機能の促進、防禦部分の拡大という新しい時代の要請が小札に造形されたと考えられるのです。

また平安後期の赤系威の兜の鞆の鉢付板の小札が二行一三孔の通常の並札なのに、鎌倉中期の紫裾濃では二行一四孔の四目札で、上部に並行する四ツ孔で縄目の先が裏面へまっ直ぐに通すことができる小札になっていて、これも進歩した形といえます。